

日本における倭館研究の動向

山口華代*

- 一. はじめに
- 二. 第2次世界大戦以前の倭館研究
- 三. 中世倭館の研究
- 四. 近世倭館の研究
 - 1. 近世初頭の倭館—絶影島倭館から豆毛浦倭館へ—
 - 2. 草梁倭館
 - ①草梁倭館の概要
 - ②倭館移転問題
 - ③倭館管理問題
 - ④倭館にみる文化史
 - ⑤倭館関係資料
- 五. おわりに

一. はじめに

「日本の倭館研究」という与えられた課題について、おもに日本で報告・発表された研究を中心に、戦前から現在にかけての倭館研究の動向をまとめていきたい。

倭館とは、狭義には15世紀初めから19世紀後半まで朝鮮半島に設置された日本人使節のための接待施設(客館)であるが、広義には客館を含めたその周辺に広がる日本人のための居住区域を指す。そのはじめは、15世紀はじめに朝鮮の都である漢城に存在した施設で、外国からの外交使節を接待するための客館であった。当時の漢城には、中国からの使節には太平館、北方の女真人には北平館、そして日本使節のためには東平館がおかれた。その東平館の通称が倭館であり、日本人使節が上京した際に滞在する場所であった〔小田省吾1929・中村栄孝1964・田代和生1981、2002〕。

日本人の客館が設置された背景には、高麗王朝末から朝鮮半島に被害をもたらした倭寇の禁圧という政治的側面があった。倭寇対策に苦慮した朝鮮政府は様々な方策で倭寇から平和な通交者への転換をはかったが、そのひとつが倭人を正式に使節として認めることであった。使節には朝鮮との貿易

* 長崎県立対馬歴史民俗資料館学芸員

の機会が与えられたのである。

朝鮮政府は次々に渡航してくる倭人が朝鮮半島の港に自由に入港していた状況を統制するために入港場の制限を行った。使送船など船舶の碇泊地を朝鮮半島南部沿岸地域である富山浦と乃而浦（薺浦）の二ヶ所に限定した。のちには前述の二ヶ所にくわえて塩浦が入港場と定められ、これら三ヶ所を日本人通交者が寄港する浦所と定めた（三浦の制）。この浦所の開設と時を同じくして倭館も設置されたと考えられている。

1510年の倭人の反乱である三浦の乱によって浦所倭館は閉鎖となるが、対馬宗氏の交渉により通交関係が復すと薺浦のみが開港し、しばらくして釜山浦が開港場として指定された。ところが、1544年の甲辰蛇梁の変によって再び通交が断絶し、このとき薺浦が廃され釜山浦一ヶ所に限定されることとなる。

日朝関係は文禄・慶長の役（壬辰倭乱）によって一時的に断絶するものの、戦後にはふたたび倭館が設置され日本からの通交者を受け入れる体制がとられた。はじめに豆毛浦に倭館が設置されるも、敷地が狭小で船の出入りにも不自由する地形であったため、対馬藩から移転が要望された。朝鮮との移転交渉は長期にわたるも、1678年には移転先として草梁項が選ばれ、以後、対朝鮮通交の唯一の拠点として幕末まで対馬藩関係者による居住が続いた。明治維新をむかえると1872年（明治5年）にいち早く外務省が倭館を管轄下にいれ、ここに倭館の歴史は終焉を迎える。

上述のような変遷をもつ倭館であるが、対馬宗家文書では、7～8割程度は「和館」と表現するものの、残り2割は「倭館」の使用例が確認できる〔田代和生1997〕。日本を倭と呼称することは古く中国に由来するが、朝鮮においても中国にならって「倭」字を使用した（倭人、倭寇など）が、「倭」が蔑視の意を含んでいることから、日本においては自国を表現するにこの字を避け同音の和の字をあてたものと思われる。しかし、本稿では倭館が朝鮮政府によって設置されたという歴史的背景を鑑み「倭館」の呼称を使用したい。（現在の日本史研究の統一的理解を示す指標と考えられる『国史大辞典』（吉川弘文館）では「倭館」（執筆者・田代和生）と立項されている。）

長期にわたって存在した倭館は、当然のことながら、時代によってもあり方は一様ではなく、数多くの研究論文が提示されている。それを網羅的に論じることは難しいが、時代に沿って代表的な論文をもとに研究の動向をみていく。

二．第2次世界大戦以前の倭館研究

第2次世界大戦以前の研究は、倭館そのものを対象にした研究は少なく、前近代の日朝関係史の変遷を語るなかで部分的に言及されることが多い。その理由として、使用できる史料の制限や対外関係史研究の蓄積の少なさなどの要因があげられよう。そのなかでも武田勝蔵は、朝鮮側史料だけでなく対馬宗家文書を使用して、中世における三浦についてその変遷と歴史的背景を明らかにした〔武田勝蔵1922〕。

この時期の倭館研究の特徴の一つに、前近代に存在した倭館を、日本人居留地として発展した近

代都市釜山の前史として位置付けている点があげられる。その端緒というべき高橋章之介は、自著『宗家と朝鮮』で前近代日朝関係史を著述するにあたって、対馬宗氏が果たした功績をあらためて評価するなかで倭館を取り上げている〔高橋章之介1920〕。具体的には、中世の三浦倭館から近世の釜山倭館、そして明治維新後に倭館の敷地及び建物が処分されるに至るまでの過程をまとめたものである。また、同書には豆毛浦から草梁の地に移転した際の絵図と思われる1678年(延宝6年)の年紀をもつ倭館竣工図が付されており、後世の研究でも活用され有益である。

旧釜山民団議員によって組織された釜山甲寅会もまた、釜山前史として日朝通交史をまとめたものである〔釜山甲寅会1921〕。中世の「三浦和館」から「釜山和館」にいたるまでを扱うが、近世の釜山倭館に比重をおいた記述となっている。「館守」・「裁判(外交担当者)」・「通詞」といった倭館役人や倭館の移転交渉を扱った「移館事考」、館内での禁制を扱った「和館制札」、館内での女性問題とそれを取り締まる約条に関する「交奸約條」といった、のちに研究対象となっていく事案の多くが提示されている。また、釜山周辺の名勝旧蹟についても言及している。

この時期に、倭館そのものに関心をもち研究対象としたのは小田省吾である〔小田省吾1925、1929〕。小田は朝鮮総督府の編輯課長という立場にあったことから、日朝関係資料の収集や倭館旧蹟の現地調査、幕末以来釜山に居住していた古老への聞き取りを敢行した成果を積極的に研究に結びつけた。開港以後に草梁倭館を中心に急速な発展を遂げた釜山地域に、前近代の遺産である倭館の歴史的景観を見出すことは困難であったことから倭館研究の重要性を説いている。このほか、文献資料を用いた基礎的研究も行っており、近世の草梁倭館にあった「設門」は倭館の一部ではなく日本人取締りのために朝鮮が設置したものであるとして、〔武田勝蔵1922〕の誤りを指摘している〔小田省吾1925〕。

三. 中世倭館の研究

第2次世界大戦後にはそれまでの対外関係史研究の蓄積のもと、日朝関係を二国間関係に限定せず東アジア史のなかで捉えようとする動きのなかで、史料に即した実証的な研究が数多く提示された。中世の倭館については、朝鮮政府によって指定された入港地である富山浦・乃而浦・塩浦のいわゆる三浦の設置と都市的発展のなかで言及される。

中村栄孝は、当該期の日朝関係は、14世紀半ばから朝鮮半島沿岸域に被害を与えた倭寇対策のために、日本人による通交体制が構築されていく過程を叙述した〔中村栄孝1964〕。

日本からの正式な使者として認めた者(客倭・使送倭人)や塩や魚など朝鮮住民とのあいだで交易に従事する者(商倭・興利倭人)などがあらわれてくる。また、倭館周辺には多数の倭人が渡海して生活を営むようになり(恒居倭人)、「倭人居留地」としての性格を強めていく。

村井章介は、東アジア国境を越えて活動する中世倭人の姿をマージナル・マンという概念で捉えなおした。中世の三浦については、港湾都市としての発展する姿をとらえた。とくに、『海東諸国紀』に残る絵図に、現地踏査をもって知りえた三浦周辺の景観や地理的状况をつきあわせて、倭人居留地が設定された地理上の共通点を指摘している〔村井章介1993〕。

四. 近世倭館の研究

1. 近世初頭の倭館—絶影島倭館から豆毛浦倭館へ—

豊臣秀吉によって引き起こされた文禄慶長の役は、それまで続いていた日朝関係を根本的に変える。まず原則として日本人による上京が禁止され、釜山浦が唯一の入港場となる。

小田省吾は文禄慶長の役が終結した直後の、いまだ日朝関係が不安定な時期に、釜山浦の対岸である絶影島(通称、「牧ノ島」)に仮倭館が設置されていたことを明らかにした〔小田省吾1929〕。しかし、あくまでも仮の倭館であったことから、将来的に日本との通交が本格化することを考慮すると使節接待所としての機能を果たすには不十分であったようで、1607年には豆毛浦に倭館が置かれた。

1609年の己酉約条によって本格的に朝鮮と対馬とのあいだの通交関係が回復すると、徳川政権による安定した日朝関係もあいまって、豆毛浦倭館は日朝貿易の拠点として繁栄していく。豆毛浦倭館の周囲には、はじめは木柵のちに石垣が築かれるなど朝鮮人と日本人とのあいだに明確な境界線が引かれることで両国人の混在を防ぐ方策がとられた。

しかし、豆毛浦倭館は敷地が狭く、また港が遠浅で風が強いという寄港地としての条件に恵まれた土地とは言い難いものであった。こうしたことから対馬藩は朝鮮政府に対して倭館地の移転を要請し、およそ20年に及ぶ交渉過程を経て、1687年に草梁項の地に移転することに成功した(「倭館移転問題」については後述)。ちなみに対馬藩では、この豆毛浦倭館を「古館」と、のちに移転した草梁倭館を「新館」と称し、成立年代の新旧によって区別している(松浦任允『朝鮮通交大紀』等)。

2. 草梁倭館

1678年に移転した草梁倭館については膨大な文献資料が残ることから、様々なテーマおよび分野にわたる研究があげられる。

長正統は近世の日朝関係を残存する「記録」の側面から見直した〔長正統1968〕。長によれば、日本は朝鮮に比べ記録体制が立ち遅れていたが、17世紀後半から19世紀中期に日本側の記録が飛躍的に増大することを指摘し、この時期を日朝関係における「記録の時代」と名付けた。長の研究は対馬藩宗家文書群にある倭館関係記録にもとづくものであるが、その記録増大の要因として、外交交渉の場面において、武力を背景にした力の外交の時代は終わり、先例にもとづく高い論理性が求められるようになり記録の重要性が増したことを指摘している。

①草梁倭館の概要

草梁倭館はおよそ東西400間、南北250間でおよそ10万坪の広さの空間で、館内に中山(龍頭山)を配し、その西側は外交の場であり(西館)、東側は居住区および経済活動の場というように、区域による機能分化がみられる。400から500名の日本人が居留し、その構成員も武士だけではなく商人・職人・医師など様々な階級の者がおり、城下町のようなにぎわいをみせた。また、対馬府中にある西山寺の末寺である東向寺(臨濟宗)もあり、供養寺としてだけでなく朝鮮からの書契の吟味等に従事した〔田代

和生2002]。

金義煥は中世から近世そして近代までを射程にいれ、倭館の変遷を通時的にまとめた〔金義煥1977〕。近代の釜山開港以後に倭館が日本専管地となっていく過程を丹念に追い、19世紀に朝鮮各地に設置される日本専管地のモデルケースと評価しているように近代まで見据えた倭館研究は特徴的である。そのほか、日朝貿易における拠点としての倭館の商業的役割に着目して、倭館に関わる日朝双方の職官構成やその役割を明らかにした〔金義煥1983a〕。また、倭館で行われる貿易形態について概観するとともに、中国との国境地帯で実施されていた対中国貿易との比較検討の必要性を主張している〔金義煥1988〕。

田代和生は、近世日朝関係史研究のなかでも研究の立ち遅れていた日朝交易に着目し、対馬宗家文書を分析対象としながら、貿易額や取引品など経済史的側面からの実態研究を行った〔田代和生1981〕。それによれば、当該期の日朝交易は日本と朝鮮との二国間にとどまらず、中国や東南アジアなどを含めた広域的な経済圏を想定できるとし、そのなかでの倭館の重要性についてあらためて述べている。倭館研究については、日朝交易史研究との関連から、主として近世の釜山倭館を対象にしている。それまでの研究では倭館を総体でしかとらえてこなかったが、田代は、倭館を構成する建造物の名称やその役割など内部構造を明確にすることで、外交の場であった西館と経済活動の場としての東館という性格付けを行った。

倭館の構成員については、長正統が対馬宗家文書の倭館関係記録(国立国会図書館所蔵)をもとに、倭館の役人の構成や職掌、そのほか歴代の館守や裁判の人名、在任期間を明らかにし、倭館研究の基礎資料となっている〔長正統1968〕。そのほか朝鮮側史料も取り入れて日朝両国の職官構成について考察した〔金義煥1983 a〕もある。なかでも〔田代和生1981〕では、対馬藩の倭館役員人事について藩の対朝鮮貿易政策との関連性を指摘するなど独自の見解を述べている。

②倭館移転問題

倭館移転問題については、戦前からすでに小田省吾が論究している〔小田省吾1929〕。小田は、中世まで朝鮮側の都合により倭館の設置場所が決定していた従来のあり方とは異なり対馬藩からの要望によって移転が実現した事実を鑑み、その理解には朝鮮資料だけではなく対馬側史料とのつきあわせが必要であることを説いている。

倭館の移転問題を扱った〔尹裕淑2003〕は、執拗に移転を要求する対馬藩とそれに対して受動的な朝鮮という同様の構図で描かれてきたこれまでの研究を批判し、その克服の必要性を主張する。尹裕淑によれば、20年ものあいだ続けられた移転の要求内容が一樣ではなく、1660年代後半から転換を迎えたことを指摘する。具体的には、朝鮮への渡口の変更や大船越開鑿などの対馬領内における対朝鮮通交の施設整備との関連性を示唆する。また対馬藩は幕府からの了解をとりつけることで移館を「幕命」にまでひきあげるといった政治工作が行われていたことを明らかにした。草梁の地への移館後は倭館をめぐる両国の統制強化がはかられていることから、「日朝通交の再整備」と評価した。

近世の「抜荷」(密貿易)の分析を行った荒野泰典は、倭館移転の背景に伊藤小左衛門による武器密輸事件があったとする。1677年(寛文7年)博多町人の伊藤小左衛門が朝鮮へ禁制品であった鳥

銃・硫黄・鎧・槍など武器の密貿易を行っていたことが露見した。この大規模な密貿易事件の発覚によって、幕府および対馬藩において密貿易対策が問題化し、より統制を強めるためにも倭館の移転が望まれたとする〔**荒野泰典1992**〕。

③倭館管理問題

草梁倭館は東萊府の釜山鎮からも離れた場所に設置され、その周囲を石塀がとりかこみ、内部にあった朝鮮人の民家が外に強制的に移住させるなど、朝鮮政府側は倭館に居住する日本人を隔離する政策をとった。

金東哲は豆毛浦・草梁項に200年ちかく倭館が設置されていたことから、そのことがもたらす周辺地域への影響や特質について論究した〔**金東哲2001b**〕。草梁倭館の整備とともに倭館近くには客舎、宴大庁などの朝鮮側の出先機関が建てられ、倭館の日常的な管理を行った。とくに東萊府の管轄下にあった下級役人である「小通事」についても言及し、その多くは草梁に居住する者であり、密貿易や交易の斡旋などによって蓄財を重ねるなど、倭館とその周辺の朝鮮人住民との関係性が深いものであった。

日本人が倭館で暮らしていくうえでの日常の生活物資(野菜・鮮魚・など)の確保は、倭館周辺地域に居住する朝鮮人に依存したものであった。倭館の内部には朝鮮人役人などの限られた者しか足を踏み入れることができなかったが、一方で倭館の外である門前には毎日のように市がたち日本人と朝鮮人とが接触する機会が生まれる。日朝間の接触が時には犯罪・事件につながり、次第に日朝両国のあいだで問題化していく場合もあった。こうした倭館をめぐる日朝間の問題について、朝鮮王朝による倭館の管理という視点で読み解く一連の研究がある。

尹裕淑は倭館の統制という観点で、約条や禁制などの法的側面からの研究を発表している。朝鮮が倭館居住の日本人に対して1683年に示した癸亥約条について検討し、密貿易(潜商)や規定区域を越えての日本人の徘徊や集団での示威行為(「闖出」または「欄出」とも書く)を厳罰に取り締まる朝鮮側の姿勢を明らかにした〔**尹裕淑1997**〕。

倭館における交奸問題(日本人男性と朝鮮人女性との売買春)については、ジェームス・ルイスが先行研究の読み直しを行っている。従来の研究では、日朝両国間の文化や倫理観の差異によって語られることが多かったが、処分の厳罰化がとられた歴史的背景には情報漏えいの防止といった朝鮮政府の政治的対策があったとする〔**ジェームス・ルイス1997**〕。交奸問題については尹裕淑も言及しており、窃盗などに関して締結された約条を分析する。これによれば、朝鮮側は当初すべてを死罪とする厳罰主義をとるが、実態にあわないうことから細かな規定を設けるとともに段階的な処罰を決めるという方針の転換があったことを指摘した〔**尹裕淑1998**〕。

また、〔**尹裕淑1999**〕では、倭館の維持管理という観点から、これまで詳細に分析されてなかった倭館建築物の造営・修理問題をとりあげている。朝鮮前期に倭館が設置されて以降、基本的に館内の建造物の造営・修理費用および人夫は朝鮮側の負担であるが、このことから倭館の管理が通交業務のひとつに位置づけられていたとする。

鶴田啓は、草梁倭館を出島・唐人屋敷・横浜居留地といった他の外国人居留地との比較を通して、

その特徴を明らかにしている。それによれば、近世の「鎖国」体制下における例外的な貿易の場として共通するが、倭館は商業活動だけではなく外交をともなう通交者のための施設であることを強調している〔鶴田啓2006〕。

④倭館にみる文化史

文化史的側面では、近世倭館に開かれた釜山窯についての研究がある。倭館で焼成された茶碗等の陶磁器は、切形や型紙などの手本をもとに作成されたことから「御本茶碗」と呼ばれ、江戸時代から珍重されていた。釜山窯については、浅川伯教がまとめたかたちで紹介をしている〔浅川伯教1930〕。

これに続き泉澄一は、対馬宗家文書に残る文献資料にある陶磁器の注文控等を分析し、これまでの釜山窯研究を文献史の側面から補完した〔泉澄一1986〕。御本茶碗の焼成には対馬藩が大きく関与していたこと、またその多くが朝鮮各地の土を用いて、大名や有力者の細かな注文に応じて陶磁器が作られていたことを明らかにした。

田代和生は近世倭館に関する史料をもとに、倭館に関わって生きる人々の様子を描き出し、日朝両国文化が交わる場所としての新しい倭館像を提示している点で注目される〔田代和生2002〕。

食文化については、朝鮮通信使の接待料理の研究によって蓄積された成果をもとに、倭館で食された料理や日朝両国人の嗜好の違いなどを明らかにした〔田代和生1996〕。

医学史・博物学史の分野では、享保年間に八代将軍の徳川吉宗が命じた朝鮮の動植物調査についての研究がある。吉宗の命によって、対馬藩は倭館を拠点に朝鮮全土を対象とした動植物および薬材調査に着手するのであるが、倭館に出入りすることのできる朝鮮訳官の協力なしには成し遂げられなかった。この調査の背景には、本草学に造詣の深い吉宗の人蔘国産化というねらいがあったことを明らかにしている〔田代和生1999、2002〕。

そのほか、草梁倭館における日本人の服飾について述べた〔鄭銀志2007〕もある。これは倭館での儀礼に参加する際の服装を文献資料や倭館を描いた絵画資料などをもとに分析したものである。文献資料の検討から、本国対馬においては倭館令による絹製の着物の着用を禁じているにもかかわらず、倭館内で朝鮮役人との接触がある者についてはそれが適用されないことを明らかにしており興味深い。

新しい研究動向として、建築史的なアプローチからの倭館研究があげられる。夫学柱による一連の研究は、倭館に関する記録に見える「指図」(見取り図)や絵画史料をもとに、近世倭館の建造物群を復元した〔夫学柱1999・2000a・2000b・2004・2006, 市川真光2004〕。その成果はコンピュータグラフィックを用いた三次元画像として公開され、直接的に視覚にうたった復元図が当時の倭館および周辺地域の景観を広く一般にも知らしめるに有効な手段であることがあらためて確認できた〔京都文化博物館等2001〕。

⑤倭館関係資料

〔長正統1968〕が指摘したように、17世紀後半から19世紀にかけて、日本側(対馬藩)の記録が増大

する。その主たるものが対馬藩宗家文書であるが、ある時期まで、その利用はごく一部の者に限られており、研究の公平性という観点からは著しく不十分であった。こうした経緯から、研究者による積極的な史料紹介が行われ、次第に研究環境の改善がはかられていく。

金義煥は、大韓民国・国史編纂委員会に所蔵されている対馬島宗家文書『和館事考』を紹介した〔**金義煥1983b**〕。『和館事考』は三浦の設置から草梁倭館の移転および工事の過程、倭館に設置された制札、朝鮮人の禁制など、倭館をめぐる諸問題がまとめられたものである。

安彦勘吾は対馬藩の朝鮮語通詞である小田幾五郎(宝暦4年〔1754〕～天保2年〔1831〕)がまとめた『草梁話集』を紹介する〔**安彦勘吾1989**〕。これは、朝鮮語通詞として草梁倭館に滞在した際の見聞を集成したもので、倭館内外の建物や港湾施設の状況、倭館の管理運営に携わる朝鮮役人、倭館周辺地域の地理的情報などに至る詳細な情報が記載されている。何より公的記録には残らない生活者の視点で記述されている点で貴重である。

近年の近世倭館関係の史料をめぐる大きな動きとして、対馬藩宗家文書の倭館関係史料のマイクロフィルム化があげられる(田代和生監修『対馬宗家文書第Ⅲ期 倭館館守日記・裁判記録』ゆまに書房、全120リール2004～2006年)。国立国会図書館に所蔵されている対馬宗家文書のうち倭館を統括する館守の日記である「館守日記」や外交交渉を担当した裁判の記録(「裁判記録」)がマイクロ化の対象となっている。これら対馬藩で作成され倭館に保管されていた文書群は、廃藩置県後に倭館を接收した外務省に移管され、その後国立国会図書館に収蔵されるにいたったもので倭館研究の基幹資料といえる。2009年には「対馬宗家倭館関係資料」(指定件数1593点)として国重要文化財に指定され、歴史資料としての価値が広く認知されることとなった。

いずれにしても、全体で10万点を超えると言われる宗家文書については今後も倭館研究の基幹資料の一つとなっていくことは間違いなく、史料集やマイクロフィルムあるいはデジタル技術の応用などによって活用の利便性が向上することが倭館研究の促進につながるものと思われる。

次に倭館の絵画資料について述べておきたい。絵画資料からは文献資料では得ることのできない多くの情報を読み取ることが可能である。1980年代以降に各地で開催された博物館等での展示によって貴重な資料が数多く存在することが紹介され、なかでも倭館の絵図は日韓両国に残されていることが分かっている。

すでに紹介したが、村井章介が『海東諸国紀』の付図と現地調査によって知り得た地形等の情報をあわせることで、中世倭館と三浦の様子やそこでの生活相を復元した〔**村井章介1993**〕ように、倭館の実態を究明するに有効な資料である。

近世の草梁倭館については、崔相振が「東萊府使接倭使図」(韓国国立中央博物館蔵)をもとに本格的な考察を行っている〔**崔相振2006**〕。分析資料は東萊府使が日本からの使節を饗応接待するために倭館に向かう様子を描いたもので、絵図の内容構成や建造物の設置年代などから景観年代の上限、下限を探ったものである。ただ、崔相振も指摘するように、絵画資料はある程度の時間的な幅をもって描かれることが多く、年代を正確に特定するに限界性もあることも念頭に置かなければならない。

最後に、筆者の勤務している長崎県立対馬歴史民俗資料館が所蔵する宗家文庫史料のなかから、すでに図録等に掲載されたものであるが倭館絵図2点を紹介したい〔**長崎県立対馬歴史民俗資料館**、

1997]。図1「草梁之絵図」(98cm×64cm)は、17世紀に豆毛浦倭館からの移館が構想された際に描かれたごく簡単な草梁項の縄張り図である。龍頭山を中心に倭館の予定地が朱線で囲われているが、その枠内外には朝鮮民衆の居住する家屋も描かれていることが分かる。図2の「倭館絵図」(163.0cm×261.4cm)は、同じく草梁倭館を描いたものであり、倭館敷地の寸法だけでなく、倭館内部の建物名および配置が書きこまれている。

五. おわりに

以上、日本における倭館をめぐる研究を、戦前と戦後という、大きくふたつの時期に分けて整理をした。最後に、今後の研究課題について、筆者の専門分野である近世倭館を中心について述べたい。

ひとつは、近世倭館の実態解明をより深めることである。日朝関係史研究の進展によって倭館の果たした役割については数多くの実証的研究が蓄積され、また対馬宗家文書の館守日記・裁判日記などの倭館関係資料が公開されたことで研究環境の整備も着実に進んでいる。こうした従来の文献資料による研究に加え、絵画資料やCGを活用した景観復元によって、より豊かな倭館像が提示されている。しかし、先に紹介した対馬歴史民俗資料館蔵の倭館絵図のように、絵図資料は文献資料による裏付けや他の絵図資料との比較検討がなされていない資料もあり、今後の実証的研究の積み重ねが期待される分野である。

さらに、日朝両国における「倭館認識」の問題がある。倭館をどのように認識するかは立場の違いが大きく作用した。朝鮮国側にとって倭館はあくまでも日本から来る使節のための客館という基本的な性格を保持していたが、その一方で日本においては倭館を「朝鮮屋敷」あるいは「日本館」とも表現するように対馬藩の屋敷の延長と捉える向きもあった。そうした倭館認識に依拠すれば、たとえば17世紀後半に対馬藩から出された倭館移転の要求は、同時期に実施されていた城下町・府中の都市整備(藩主の居住する棧原屋敷の設置、新たな町割りなど)と連動したものと考えることも可能である。倭館の管理運営の状況を見ると、主要な建物や港湾施設等の建築・修築については朝鮮側が負担するなど客館としての性格が依然として確認できるのだが、交奸問題のように細かく事案を検証すると倭館の所属をめぐる心性レベルでの認識の齟齬が存在していたように思われる。

最後に、前近代の国際秩序をめぐる問題があげられる。18世紀以降、朝鮮では「小中華」、日本では「日本型華夷意識」と、日朝両国ともに自国中心主義的な傾向を強めていくというのが有力な説である。そのなかにあって、倭館は基本的に中世以来の客館としての機能を持ちつづけ、対馬から派遣された使節は朝鮮側の国際秩序にかなった外交儀礼を執り行っていた。倭館という舞台装置が果たした役割を再検討していくことも必要であろう。



図1 草梁之繪圖



図2 倭館絵図

倭館 文献目録

刊行年	著者	表題	出典
1920	瀬野馬熊	「李朝の初世における対鮮の交通と三浦の居留地」	『朝鮮及満州』151
1920	高橋章之助	『宗家と朝鮮』	京城・北内印刷所
1921	釜山甲寅会編	『日鮮通交史 附釜山史』	
1922	武田勝蔵	「日鮮貿易史上の三浦と和館」	『史学』1-3
1925	小田省吾	「釜山の倭館と説門に就いて」	『朝鮮』125
1929	小田省吾	「李氏朝鮮時代に於ける倭館の変遷 就中絶影島倭館に就いて」	『朝鮮支那文化の研究』 刀江書院
1930	浅川伯教	『釜山窯と対州窯』	彩壺會
1932	中村栄孝	「鮮初の対日関係と浦所の制限」	『朝鮮』202
1934	中村栄孝	「江戸時代の日鮮関係」	『岩波講座 日本歴史』6(旧版) 岩波書店 のち〔中村栄孝 1969〕
1936	小田省吾	『朝鮮陶磁史文献考 附釜山和館考』	学芸書院
1964	中村栄孝	「浦所の制限と倭館の設置」	〔中村栄孝1965〕所収
1965	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』上	吉川弘文館
1967	中村栄孝	「外交史上の徳川政権」	〔中村栄孝1969〕所収
1968	長正統	「日鮮関係における記録の時代」	『東洋学報』50
1968	中村栄孝	「江戸時代の日鮮関係」	〔中村栄孝1969〕所収
1969	中村栄孝	『日鮮関係史の研究』下	吉川弘文館
1970	金義煥	『釜山地方の地名の由来』	大和出版社
1977	金義煥	「李朝時代に於ける釜山の倭館の起源と変遷」	『日本文化史研究』2
1979	田代和生	「対馬藩と倭館貿易」	『江戸時代の朝鮮通信使』毎日 新聞社
1981	田代和生	『近世日朝通交貿易史の研究』	創文社
1983a	金義煥	「釜山倭館の職官構成とその機能について— 李朝の対日政策の一理解のために—」	『朝鮮学報』108
1983b	金義煥	「対馬島宗家文書『和館事考』について」	『日本文化史研究』5
1983a	李進熙	「倭館・倭城を歩く(1)」	『季刊三千里』30
1983b	李進熙	「倭館・倭城を歩く(2)」	『季刊三千里』31
1984	李進熙	『倭館・倭城を歩く—李朝のなかの日本—』	六興出版
1986	田代和生	「近世後期日朝貿易史研究序説」	『三田学会雑誌』79-3
1986	泉澄一	『釜山窯の研究』	関西大学出版部、関西大学東 西学術研究所研究叢刊5
1987	田代和生	「対馬藩の朝鮮米輸入と「倭館枴」—宗家記録 『斛一件覚書』からみた朝鮮米の計量法」	『朝鮮学報』124

刊行年	著者	表題	出典
1988	金義煥	「釜山倭館貿易の研究—15世紀から17世紀にかけての貿易形態を中心に—」	『朝鮮学報』127
1989	田代和生	「幕末期日朝私貿易と倭館貿易商人—輸入四品目の取引を中心に—」	『徳川社会からの展望—発展・構造・国際関係』同文館出版
1989	安彦勘吾	「〔資料紹介〕草梁話集」	『帝塚山学院短期大学紀要—人文・社会科学篇—』26
1990	田代和生	「近世における対馬と朝鮮」	宮田登編『海と列島文化 3 玄界灘の島々』小学館
1990	信原修	「『誠信堂記』をよむ」	『朝鮮学報』136
1991	崔永禧	「朝鮮後期の通信使と倭館の役割」	『季刊コリアナ』91—冬
1991	ジェームス・ルイス	「壬辰丁酉倭乱以降江華島条約以前の朝鮮からみた対馬」	『地方史研究』232
1992	荒野泰典	「小左衛門と金右衛門—地域と海禁をめぐる断章—」	網野義彦編『海と列島文化 10』小学館
1992	金義煥	「『倭人作拏臚録』について」	『日本文化史研究』16
1992	ジェームス・ルイス	「近世朝鮮人の日本観—倭館における公貿易接待の費用を例示として—」	『年報朝鮮学』2
1992	田代和生	「日朝交流と倭館」	丸山雍成編『日本の近世』中央公論社
1992	朝日新聞社文化企画局編	『宗家記録と朝鮮通信使展—江戸時代の日朝交流—』	朝日新聞社
1993	村井章介、荒野泰典、高橋公明、孫承喆	「三浦から釜山倭館へ—李朝時代の対日交易と港町」	『青丘学術論集』3
1993	田代和生	「鎖国時代の日本町—朝鮮半島の倭館」	月刊『しにか』4—12
1994	加藤十握	「『愚塵吐想』翻刻」	『巖原町資料館所蔵古典籍目録』
1995	村井章介	「三浦の乱時のソウル倭館」	田中健夫編『前近代の日本と東アジア』吉川弘文館
1996	池内敏	「倭館と漂流民の明治維新」	『日本史研究』411
1996	木部和昭	「近世期における朝鮮漂流民と民衆」	『山口県史研究』4
1996	ジェームス・ルイス	「江戸時代の釜山倭館の記録にみる日朝関係—「迷惑」から相互理解へ—」	『半島と列島のくにくに 日韓比較交流史入門』新幹社
1996	田代和生	「近世倭館の食生活」	季刊『Vesta』26
1997	諸洪一	「明治初期における日朝交渉の放棄と倭館」	『年報朝鮮学』6
1997	尹裕淑	「近世癸亥約条の運用実態について—潜商・蘭出事例を中心に—」	『朝鮮学報』164
1997	田代和生	「倭館における日朝関係と対馬藩—外交・貿易・文化交流をめぐって—」	『中央史学』20
1997	ジェームス・ルイス	「釜山倭館における日朝交流—売春事件にみる権力・文化の相剋」	中村質編『鎖国と国際関係』吉川弘文館
1997	長崎県立対馬歴史民俗資料館編	開館二十周年記念特別展図録『対馬と韓国との文化交流史展』	
1998	尹裕淑	「約条にみる近世の倭館統制について」	『史観』138
1999	尹裕淑	「近世倭館の造営・修補について」	『歴史評論』595

刊行年	著者	表題	出典
1999	夫学柱, 三宅理一	「倭館における港湾施設群の復元的研究」	『学術講演梗概集』F-1
1999	田代和生	『江戸時代朝鮮薬材調査の研究』	慶應義塾大学出版会
2000	金東哲 尾道博訳	「翻訳 朝鮮後期倭館開市貿易と東萊商人」	『日本文理大学商経学会誌』19(1)
2000	田代和生	「徳川時代の日朝関係と倭館」	『鏡のなかの日本と韓国』ぺりかん社
2000a	夫学柱, 鶴智子, 三宅理一, 渡辺洋子	「近世釜山における草梁倭館の復元的研究 : その1 館守家指図の比較と編年」	『日本建築学会学術講演梗概集』F-2, 建築歴史・意匠
2000b	夫学柱, 鶴智子, 三宅理一, 渡辺洋子	「近世釜山における草梁倭館の復元的研究 : その2 西館指図の比較と編年」	『学術講演梗概集』F-2, 建築歴史・意匠
2001	金東哲, 吉田光男訳	『朝鮮近世の御用商人 貢人の研究』	法政大学出版局
2001	金東哲, 金尚會訳	「民衆世界 十七～十九世紀の釜山倭館周辺地域民の生活相」	『年報都市史研究』9
2001	田代和生	「幕末期日朝私貿易と倭館貿易商人 : 輸入四品目の取引を中心に」	井上勝生編『開国』(幕末維新論集) 吉川弘文館
2001	夫学柱	「近世釜山における草梁倭館の復元的研究 : その3 開市大庁指図の比較と編年」	『学術講演梗概集』F-2 建築歴史・意匠
2001	京都文化博物館等	『こころの交流朝鮮通信使—江戸時代から21世紀へのメッセージ—』	京都文化博物館、京都新聞社
2002	田代和生	『倭館—鎖国時代の日本人町』	文藝春秋(文春新書281)
2003	鶴田啓	「釜山倭館」	『日本の時代史14 江戸幕府と東アジア』吉川弘文館
2003	尹裕淑	「一七世紀における日朝間の倭館移転交渉」	『史観』149
2004	田代和生監修	『マイクロフィルム版 対馬宗家文書 第Ⅲ期 倭館館守日記・裁判記録』	ゆまに書房
2004	石川寛	「接收後の日朝交渉と対馬」	『九州史学』139
2004	夫学柱	「近世釜山における草梁倭館の復元的研究 その4 館守家および開市大庁の位置的考察」	『学術講演梗概集』F-2
2004	市川真光	「近世釜山における草梁倭館の復元的研究 その5 館守家の空間構成について」	『学術講演梗概集』F-2
2005	田代和生	「近世倭館における朝鮮との交流」	『歴史と地理』585
2005	崔相振	「近世倭館における「接待」にみる日朝関係」	『韓国言語文化研究』8(九州大学韓国言語文化研究会)
2006	金光林	「東アジアにおける越境経営の先例—新羅坊・倭館・唐人屋敷を拠点とした貿易と国際活動」	『新潟産業大学経済学部紀要』30
2006	崔相振	「『東萊府使接倭使図』の再考—景観描写の分析と年代推定の限界性について—」	『韓国言語文化研究』12(九州大学韓国言語文化研究会)
2006	鶴田啓	『日本史リブレット41 対馬からみた日朝関係』	山川出版社
2006	夫学柱	「近世日朝通交拠点「草梁倭館」に関する指図の比較とその編年」	『日本建築学会計画系論文集』609
2007	田代和生	『日朝交易と対馬藩』	創文社
2007	鄭銀志	「草梁倭館にみる日本人の服飾」	『アジア文化研究』33
2008	佐伯弘次	『日本史リブレット77 対馬と海峡の日本史』	山川出版社

刊行年	著者	表題	出典
2008	信原修	『雨森芳洲と玄徳潤—朝鮮通信使に息づく「誠信の交わり」』	明石書店